

戦時抵抗者インター日本部(WRI-JAPAN)大阪支部の正々堂々

83, 9, 20

135

戦争抵抗者インター日本部(WRI-JAPAN)大阪支部の正々堂々 発行所 大阪府

war resisters' international

反原発全国集会報告一

「反原発運動論」ノート

都市の運動論に不在の意味

デモについて

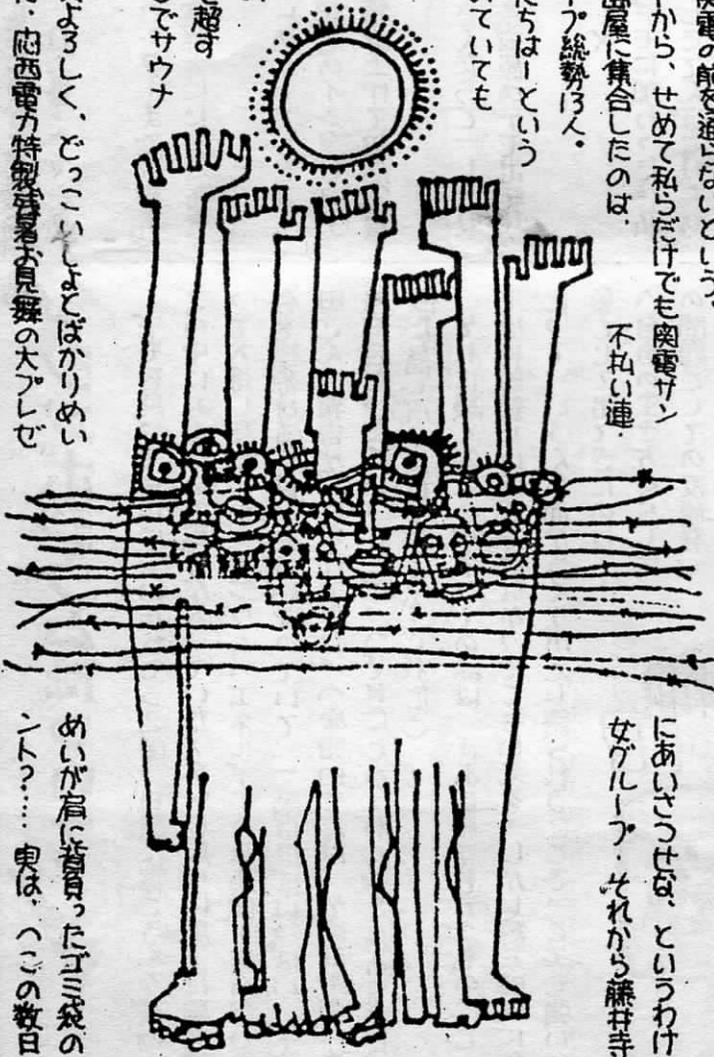
8月27日、反原発全国集会が一日、午後二時からの開会に先立って、京都グループ呼びかけの市中デモが、12時半からある。が、コースは奥電の前を通らないという。

せっかく京都にきたんやから、せめて私らだけでも奥電サンで、その日、京都高層屋に集合したのは、
てんぼこりんの百姓グループ勢は、
さて、その面々のいでたちは一と、
と、如メートル先きを歩いていても
パーンと目につく原発
内で着る赤色の防護服を
着こんで(これ、教習原
発で使用するホンモノ
だよ。いかにも使いすての
ペランペランヤ)、30度を超す
日中で、干だらだらのままサウナ
風呂。

不払い連

にあいさつは、というわけ
女グループ、それから藤井寺

そして、サンタクロースよろしく、ごっこいしよばかりめい
中には、ごっこいしよばかりめい、
関西電力特製着る、負舞の大プレゼ



めいが肩に背負った、
ント?... 電は、(この数日

間、昼夜の大作業でつくった。ピース空缶のラベルをはりかえた核廃「棄」物ドラム缶のミニキュア百五十個あまりと、口上書。(マン画入りのミニビラ*同封ビラ参照)

(これを京都目抜き街の繁華街、奥東京都サービスマンセンターまで約七キロのデモをして、店頭入口にビラをはり、往來のお客様方にドラム缶をひとつづつ差し上げようという寸法。

「もうけは関西電力に、危険はお客様に、」のシュプレヒコールよろしくねり歩いて、昨夜連絡しておいた新聞記者のインタビュアーに当たったり、店頭ミニキュアドラム缶を高々と積み上げて記念写真を取ったり、まずは宣伝戦争の第一歩。

ミニドラム缶を手にしてとまごつ京都のおかみさんたちと一しきり反原発宣伝をかわしながら、妨害なしで、無事三条河原のデモ出稼地へー

12時半、約四五百人、全国から集った仲間のデモに加わった。私たちの赤い防護服と、クワを肩に、ムシロを背にしたてんぼごりんの百姓スタイルは、テレビや新聞のカメラに狙われ、ばなし。

それに、デモ全体の雰囲気、プラカードは多かつたものの、まあオールドソックスで、おとなしかつたので、赤い服の集団は、景気づけには多少役だったかも。

私としては、とにかく都市の反原発運動は、宣伝戦争としてやる以外ないんやから、人数が少い時はなおさら、切角のこの機会に、みんながそれを意識して、京都市民のうわさの種になるような、ひと工夫もした工夫もができたらーと思つた。

(ふっ)

シンポジウムについて

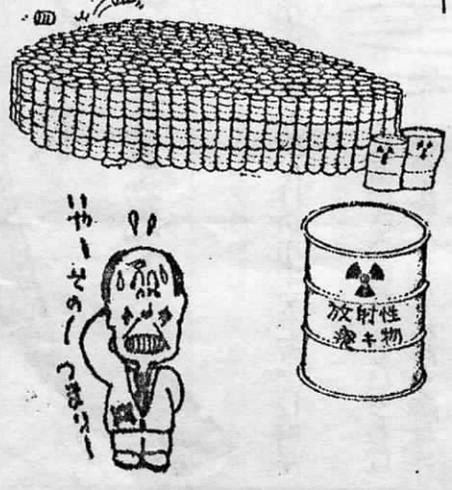
デモを終って会場にいたらもう2時。日陰に寝ころんで荷物へこの中にみんなの入場券が入っていたノダシを取りに戻った組を待って入場したら、シンポジウム「エネルギーの未来像」核のない社会を構想する」は、もう始まっていて、一階はほぼいっぱい。宇治田さんの報告が終りかけていた。(宇治田さんは、その日断食二日目だ。たということだ。へそれにもかゝわらず、あの気迫に落ちた話しぶりにはおどろかされた。)

それに続く四人のパネラーの話は、まあ反原発を云つものにとつては格別新しい内容ではなかったともいえる。しかし約三時間に向わたり、いろいろな面からくりかえし語られることで、とても強い印象として出てきたのはー

へ自分の生き方くらうし方の問題としての反原発

ということだった。

例えば玉野井芳郎さんは、自分の思いとして「原発は生命系というべきものに反する」といい、原発をつくり出した現代社会のすべてについて



根柢から見直しをせまられることで、自分の専門である経済学とはそもそも何かを問うようになる。

「経済学というのは、ほとんど人民に関係ないものですよ。あれは國家のための学です。國家の経済がいまま。でも、人民はそれと関係なくくらしていけるものなのだ。イタリアなどは、國が困っても人民はいっこうに平氣だ。裏の経済で人民は喰って。」

ところが日本は、いま、すべてが國家にからめとられている。國がこけたら、人民もこける。この關係をなんとか断ち切りねばならぬ。原義みたいな中央集権的なものをやめて、その土地その地方に独立した産業を育てるのが急務です」

また、佐藤進さんは、「では運動をどうつくるのか」という質問に「そのことはあまり考えたことがない。たゞ自分ははじめにのべたように六十年代にこの高度成長経済と原義について批判したように、自分の感性が原義を否し、反対なのだ。へ佐藤さんが運動を考えたことがないというのは意外だった。しかしそれだけ容直な答だったのだろう。」



そして二人の女性パネラーは、これらのことを、もっと直截単純に「反原義は、自分にとって自由や解放につながるもので、運動もそれ自体が自分の楽しみでなければならぬ。その点まだ、反原義運動は男であると思う。どう運動するのかという問いには、自分のいる場所で、自分のできることをやっていく」と話した。

「反原義は、単に原義阻止にとどまるもので

はなく、まず何よりも人々の生き方くらし方を問う直すものであること。既成の価値感をひっくりかえし、新しいライフスタイルを創り出すものとしての反原義が、パネラーたちの口々から、個人の生き方の姿勢・信条・倫理として語られた。それが今回のシンポジウム全体を通じての特徴であり、翌朝の各紙がいずれもそれを取り上げたように、全員に与えた強い印象だった。

（たゞ一人特別報告をした、高知県窪川の島岡幹夫さんのをのぞいて、すべて原義現地から疎遠の都市生活者であることにおいて、これらの発言がきわめて都市的であり、おのずから都市の反原義に視点があかれた発言であったということは、ここで充分確認しておいてよい。その意味で、へ反原義へにおけるこれは一つの面であって、現地の反原義は又他の要素を持ったものとしてあらわれていることはいっまでもない。

しかし又、その現地住民も又、その日常生活様式において、ほとんど都市化し、あるいは都市植民地化を免れないことにおいて、このシンポジウムでの問題を又免れることはできないことも明らかである。

そしてこれらのことが、全国集会でこのように強く打出されたことは、はじめてといってよく、また他の運動では決してみられないこと、ではなからうか。

しかしまた、そのことを原義阻止のへ運動として、どうつくっていくか、となると、個人のへ生き方としてとはともかく、へ運動論としては、全く出なかったのは、ほとんどの人々がへ運動論の欠陥に気付いていないで、自分の思い込みで動いている、運動し

ている状況を物語っているというほかない。

シンポジウムにおいて受けとめるべき教訓は、まさにそのことであり、シンポジウムの意味はそこに気付くことにあったというべきである。

分科会について

28日・オニ日、私たちの不払い連は、オ六分科会で「報告」をする
ことになっていた。が、それに先立って、私たちの見解はこうだった。
（これは推定が多分に入っているけど）実行委は、このオ六分科会で
「都市生活者の反原発を採る」というテーマをあげたものの、それを
どうすゝめたらよいか、殆んど見透しも見当も立たず、他の分科会に
は大ていつている字者や助言者も見つからないまゝ、しどくおびな
りに原閑連を通じて、私らのこゝへ報告要請が廻ってきたのではない
か。だからテーマにしても、も、と明確に「都市の反原発運動」とは
という風にはならず、△：反原発を採る△などという、さわめて心情
的であいまいなものとしてしか、とりあげられないことになった……
つまり「都市の反原発」という意識はあ、ても、△都市の反原発運
動△という問題意識はほとんどなく、もしあるとしてもたゞ△反原発
運動△という総称のうちに一括されて、都市は消されている。そして
都市そのものとしての特殊性は、「こゝもまた現地である」という論
理の短絡で見捨られ、運動論的に重要な意味も存在も「認知」される
に至っていない。

そのようなものとして一圧倒的に都市生活者が多いにもかゝらず

（この全国集会の状況は）ある。

この「都市の反原発運動」の、都市生活

者（市民運動グループ）自身からの

「不認知」という問題は、たとえ

ばオ一日目のシンポジウムの

なかに、はっきりと示され

ていることにおいて、運動上き

わめて重大な問題を示唆する。

パネラーたちが、その個人的な信条と

して熱く、くりかえし語ったのはまさに、

オ六分科会のテーマ「都市生活者の、反原発を採る」

ことにおいての、その個人的な生き方・くらし方の

変革だった。

しかもそれらが全く異議なく肯定された上で出た質問、

「ではどう運動をつくっていくか」に対して、どのパネラーたちが

らも、すでに語られたこと以上の答が、ついにいなかったことは注

目しておいてよい。

念をおすならば、この時の質問「ではどう運動をつくっていくか」

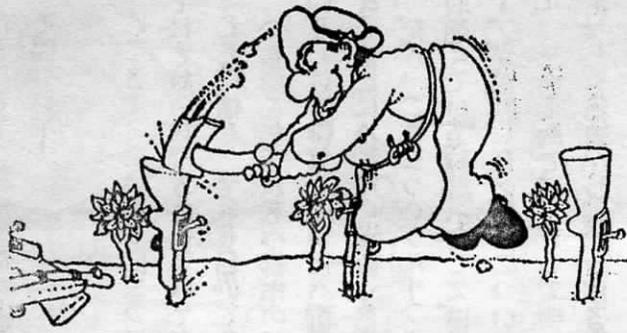
は、「現地での反原発運動をどう」ではなく、はっきりと「都市生

活者の「都市の反原発運動をどう」つくっていくかとして考えら

れねばならないことはいうまでもない。

（こんどの全国集会のひとつの特長は、一九七五年と比べて、参加





者の圧倒的な部分が、(一)教員の間に、それこそ誰の指示も勧誘もなしに、あちこち思わぬところから発生してきた全国各都市の反原発市民グループの人たちだった、ということがいえる。

そこで、では、その一原発現地からではなく、それぞれの都市の中から出てきたそれらの市民グループが、いったいどんな運動をつくり、しているのか――

その奥例として、丁度A県A市のAさんから来た手紙から要約してみよう――

『……全国集会へはA市から「反原発市民の会」(向井記、仮に、以下「反原発派」とよぶ)と「原発いらんわい市民の会」(向井記、仮に以下「生活派」とよぶ)の二つがいきます。

「反原発派」は近接の現地に行ったり、つゆくさの実験をしたり、県警青年部(それにつながって地評EFC)や現地对策会議とのつながりもあって、核燃料輸送阻止やヒヤリング斗争をもしています。そのグループ主張は、現地一号炉の廃止二号炉建設阻止・万一重大事故がおこればA市も放射能で汚染されるから現地と共同運命にある。A市もまた現地だ、従って無関心のまま放置できないというものです。

「生活派」は、自分のくらしと原発の

関わりを直し直しながら、被曝労働問題や、廃棄物問題、石井文明、産油国、日本資本主義、オミ世界、社会主義国問題……というふうに、現代の体制総体がつきつけている課題を、一つ一つ取り上げていこうという志行があると思います。メンバーも、在日朝鮮人、障害者、女性、労働運動、安全食品問題などいろいろ市民活動家がいるのが特徴です。「反原発派」の主張に特に異存はない。まあ同じだということで、何かのときは、しよにやる……といった関係で、現地斗争にもしばしば参加しています。……』

さてこのAさんからの手紙による分類に加えて、もうひとつ、労働運動・新左翼系諸党派など、あるいはその離党派の活動者グループ(仮に以下「運動派」とよぶ)を加えて、大よそ三つに区分すると、たとえばわたしらの知る範囲での大阪の反原発諸グループの傾向は、ほとんどカバーできるところ。

X X X
 いうまでもないことだが、この三つの区分はもちろんその一部分をのみとりあげて強引に裁断した図式にすぎない。実際ではこんなに割切れるわけではなく、一つのグループ内でもいろんな立場や考えが入りまじっている。それを具体的にいえば、A反原発派でもA運動派でもあって、もAライフスタイル派の認識を切実に受けとめない者はいない。

(一)のような多層性こそが、反原発運動への特質であり、この特質においてA反原発運動は、60年代・70年代の諸運動を超えて、すぐれて80年代運動を代表するものだ。

だから、この区分の意味は、各グループの特長的一面だけをと

のけることで、都市総体の運動状況を分析理解する便宜以上を出るものではない。

ところで、このように三つに区分したグループは、都市のなかで、それぞれのやり方で、それぞれへ自由流の反原発運動を進めていることを確信し、それを自他ともに疑わない。

(も) ともそれをへ都市の反原発運動と積極的に考え、推進しているわけではない。またへ都市の反原発運動と云われることを否定するほどにへ都市の運動を問題として考えているのではない。

だが、この三つのグループの違いといえるのは、反原発として主に取組んでいる課題(たとえば労働者被曝とか、核燃料輸送とか、グループが選択した分野)についてだけであって、運動のやり方やスタイル、その志向では、まるで申し合せたように同じなのだ。云ったらあそびに各派から異論が出たろう。

しかし、その一回でこのことを、違つて認識している各派グループの無意識的な運動観こそが、いまへ都市の反原発運動の意味を見失わせ、その運動論を不在のまんに仕立てるのであって、それに気付くことから、ようやくへ都市の反原発運動論は始まる、といわねばならぬのである。

では一いついいついで、三つのものの運動がへ同じやり方へ同じ志向か、あるいはへ同じ志向かあるのか。

x x x

さて、この三つの区分のなかで、へ反原発派へ相対的に出発が早く、運動が他にないでまかりへ至るまで、反原発一本で、運動を一貫し

てきた点では、一応その地域の反原発運動を代表するような立場、といえるだろう。

その性向は、およそまじめで学究的で、運動のやり方もオーソドックスな、いわゆる正攻法である。

メンバーは組織的な背景を持たない、それぞれひとり立ちした一運動がまるで生甲斐のように熱心な個人で、いわゆる活動家タイプでなく一教師や公務員などにみられるへ自識的市民といった人たちである。

それゆえ、また彼らのやり方は、それまでに見聞し経験したやり方を参考することにおいて、既成の市民運動から脱け出していない。

つまり、彼らが市民としてやりだした反原発運動は、反原発がその属性としてもつへ新しい質の運動へ運動スタイルの新しい創出へと向わず、その運動への熱心さ、まじめさに収斂化され、きわめて既成的で穩健なものである。(その意味では、一般市民がこびな企画や、過激な行動に対して、拒否的反応を示すのと同じように、しばしば保守的傾向を露呈する。)

しかしまた、へ反原発派といいついいつにおいて、彼らは何よりもへ原発現地の状況と動向について、切実に憂慮するのは、そのまじめ熱心さからも当然のことだろう。



70年代の「反原発運動」は、そもそも運動が現地からはじまり、長い向、その現地の闘争のみによって維持されてきたことが特長である。その経緯をもふくめて、彼らの運動は「現地での共同運動」を自らに目指すものからにはじまり、それをえなかつた。その意味で、自らの居住地をも現地と認識することが、何よりも現地とつながり、現地闘争の一翼に加わるようになっていった。

だが、「都市もまた現地」であるとしても、では現地と都市は同じかと問うだけで、その結論は明らかになるまい。



現地にある闘争の明らかに対象や具体的問題は、都市ではまるっきり見当らない。そこで、近接現地への「ご入札」か、現地在場した裁判支援、あるいは都市の中に現地的敵対象を見出して一例えは核燃料の通過に対する監視行動や、京大実験が二重炉建設反対など、自分らの運動を向けることになる。

それは明らかに「現地志向主義」あるいは「都市の現地主義」と呼んでよいものであって、「反原発」の運動の特長である。共に「反原発運動」が、根強くひろい傾向といわねばならない。

× × ×

さて、つぎの「ライフスタイル」および「運動」は、「反原発」に比べて、時間的にすこし、又は大分おくられて発生したといふこともあって、「反原発」の運動に参加することや、あるいは直接「現地」を訪ねることが運動のはじめである。そして、10.26反原子力の日の共同行動や、ヒヤリング闘争などで、そのグループの活動を示すようになってきたものといえる。

「ライフスタイル」の特長は、「反原発」を前提として、自分個人の生き方からしかかわる「新しい価値感」へのめざめが、その根底に共通してあることだろう。

そこで出てくるのは、「自分はどつするか」であり、「私はどうこれ以上の電気はいらない」「ムクな電灯は一つ一つ消して歩く」といった「身体的な身のまわりのこと」からはじまって、個人の生き方をひたすら追求することで自己を充実させながら、そのことをとりぬく人にも語り、すすめることで「反原発」をひろめるという、きわめて信念的な個人のはたらき、ということになる。

もちろん、それだけでは決して充分ではない。といって、それ以上に「自派独自の運動の分野を見つけていくことができる」といふ「しばしば」反原発と合流し共同行動に加わることで、あるいは同種のことを自分の運動として取りあげることで、外見上は「反原発」に「かわらない動き」ももてるということになる。

そのかぎりでは「ライフスタイル」もまた、現地志向の追従的運動といふほかない。

「運動」の特長は、闘争現場を至上とすることでの「反原発」

至上主義である。またイデオロギー的には労働者階級を重視することにおいて、反原発労働者や労働者被曝者などの問題に当然強い関心を持っている。

彼らの目指すものは、単に原発建設の阻止ではなく、現代社会の政治的変革だが、反原発運動としての独自の向争をつくり出しえないことにおいて、具体的な活動では反原発派の同調者として、動く外にない。

それは、また、自己の現地主義とも符合し、むしろ好都合ともいえることなのである。

さて、さきに三つのものの運動が同じやり方・同じ志向で、いわば同質であるといったのは、このように、それぞれが現実にくみあっている具体的運動が、現地志向的以外のものではないこと。さらにその運動のやり方が、過去の運動の経緯をそのまま継承した既成の運動手法を容易にぬけ出すことなく、新しい運動の創出にむけての意図的な追及がなせりにされていることにおいて、奇妙にも同質であるからにはかならない。その上でなお違つというならば、それは名称や構成メンバー、活動地域、それに抽象的な立て前での、いわば名目だけのちがいでいべきであろう。

では、この三つのものが同じであること、或は反原発派的運動のひとつに向いていることが、果してよいのか、わるいのか。それが、大都市の反原発運動を考えると、どんな意味を持つか、である。

ところで、お互に発足した八何が何でも原発に反対する者たちの

グループや、とくに八不払い連は、その当初から、都市の反原発運動を意識的に追及するなかで、都市そのものを対象とする反原発戦争論を主張してきた。そして不十分ながら戦術的にも実践してきた、ということがある。

（八宣言戦争論については、漫才台本「花の応援団回答、非暴力直接行動19号」「宣伝戦争とは何か」、今18号「都市と現地」、イオム通信29号）つかれたばれ、都市の反原発運動「私論」、おまきま、くら4号、などであれこれ書いているのでここでは記述を省略する）

そこで全国集会の28日、オ六分科会での不払い連の「報告」はそのことを踏まえて、反原発戦争論を提起し、その実践的経験の反省をも含めて、分科会参加者に大都市の反原発運動の意味と在り方を問う（このことについては、まず大都市の反原発運動の八認知を八宣言戦争論を通して迫るという企図だったわけである）

そしてはからずも、その不払い連の提起に、ちようむバトンをタンクし、問題を預けるようなものとして出てきたのが、前日行われたシンポジウムに外ならなかった。そこで語られたのは、



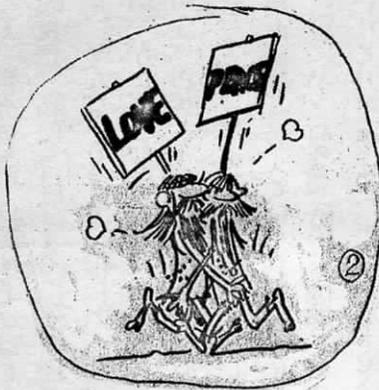
都市生活者であるパネラーたちが、その個的信条そのものの表明としての、まさにへ都市の反原発へのあり、そこから当然出てこなければならぬへ都市の運動への前提となるへ共通理解へあるいはへ土台へとなるものだ。だからである。

もちろんシンポジウムは、それ以上に発展しなかった。

個人的な信条、あるいはそこから発するいとなみとしての動きは、運動のはじまりとなって、そこでいつまでも自足するがぎりやはりへ運動へとはなりえない。

何よりも運動は、自分だけでなく、ひとと共にするものである。自分だけにとどまるのではない問題を対象にし、多数をやりうごかそうとすることで、無意識的にでもかならずへ戦略・戦術へ運動論を皆後にもっているものである。

その意味でパネラーたちは、「では運動をどうつくっていくか」の質問に対して、運動論をまだ持ちえていないことにおいて、答を口にもよりしかたなかったといえるだろう。



ところでオホ分科会へ都市生活者の反原発を探るへは、さらに内容を区分して、午前中へ都市の反原発へ、午後へ都市と現地との連帯へを討議するということになっていた。

（分科会を設けた比重はむしろ後者にあつたのかも知れない。しか

しへ都市の反原発への主体性確立がなくして、現地との連帯は虚像であろう）

結論的経過からいえば、分科会は前者の時間が延長して、午後の時間にすこし喰いこんだものの、まとまりのないままへ現地との連帯へへと移行した。

しかしそれも、前記でいう分類のへ運動へグループから、突然提案された「放射線被曝線量基準の緩和を図る法令改悪の動きについての反対」というへそれ自体はまったく当りまえで誰も異議はないへ一件の決議採決をめぐって、すこしばかり紛糾することになった。（他の二・三の分科会でも同じ提案が出され、それを採決したところもある）

この決議に反対したのはへ不払い連へだった。提案者の「反原発を云うものなら誰もが首肯すること」を、どうして決議でけんのか。拍手で決めれば一分面ですむではないか」という主張に対して、場内の大多数へつまりへ反原発派的へとライフスタイル派的な、いづれかの立場にある人たちの反応は、はっきりとした発言であられたのは、「まあ、やらぬよりやる方がまし」というところ、あとは反発と賛成が、それぞれとなりものものやうにたむいて私語しあったり、ヤジをこぼしたり、少なからず騒然となった。

不払い連の反対主張は、「そのような形式で名目をつくるだけのやり方ではもうダメだ」という地点から、反原発運動は出てきているはずだ。決議や宣言が読みあげられた瞬間から、みるみる萎えしほ

勤が、そこで創り出し、新たに得たものは一体何であつたかについて、その二日間に過ぎ、表面だけを云々するならば、おそろく大きい評価は生れないだろう。

だが、私たちのグループはすくなくとも、自分らがやってきたことについての切実な省察を、「報告」を契機に改めてするべきであつた。さらに千数百人の仲間との出会いやその声を聞くことで、私たちのグループの主張や行動や、その裏付となる運動論が、日本の反原発運動全体のなかでどのような位置に置かれているか、その状況の中で果しうる役割は何か、を考慮することができた。それは私たちが今後もすすめていく運動の方向についての、確信ともいふべき大きな力づけにはかならない。

そのことはまた、他のグループにどうとも同じであるはず、といえるだろう。

最後に、あの全国集会で、私たちが声を大にして叫びたかつたことをかく。

— いまこそ、日本の反原発運動の中に、大都市運動派を名乗る都市住民グループの大登場を！
(追記)

★ 分科会で不払い連に与えられた「報告」時間は、約10分。そのあとの討論の発言も、何しろ百人近い参加者の中で、出しゃばって何回も発言を求めるわけにいかず、向題提起を正確につけておいてもらえたかどうかが、あやふやなままに終つてしまった。

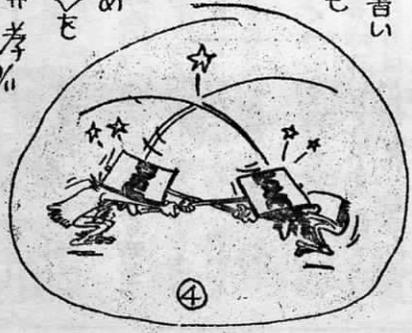
その分科会で、たゞひとりだった東京からきたという女性へたしか石川さんといつたが、自己紹介のとき「浜岡原発の現地闘争に出

かけたが、どうしてもとけこめなかつた。自分の思いにもぴたりこず、帰つてからいろいろ考えた。都市で運動をすすめるにはどうしたらよいか、それをききたい」といふ私たちの向題意識にふれる発言をした。それにも答える機会がないまま、今も心にのこっている。

★ 28日、全体集会の終り頃、広島島の栗原貞子さんに会つた。20日夜の愚安亭遊佐さんの一人芝居にふれて、「水保では砂田さん、そして反原発のむつでは遊佐さん」と、両いの現場からはすばらしい語り部がでるものなのね。ヒロシマにまだ出ていないへほくは栗原さんの詩がそうだと思うのだが、のが残念だわ」と話されたのが強心にのこっている。この、すばらしい語り部遊佐さんを、運動の中で大切にすると共に、私たちの周辺からも、ぜひ生み出すための土壌をつくらねばならない。

★ 九月二日以来、犬山へきてこれを書いたのだが、三、四枚書いては、コピーもとらず大阪へ送るといふことだった。で、内容の重複や、云うべきことの脱着が多少にある気がする。書きこばし、乱文が気になっている。

★ それと、今迄に書いた小文をあつめて2、30頁のパンフとして、反原発運動論をまとめて出したい。不払い連発行で。 向井孝孝





風

▲ 正月2日の新年会で、今までは非暴力直接行動を毎月出すぞとたしか云ったような気がするのだけれど、前の号をとりだしてみたら、日付がナント6月25日になってるのだ。だからこれは、2ヶ月ぶりの久々の号というわけだ。

▲ (この四五号、向井さんが書いた詩をあつめて詩集を出します。10月

4日の向井さんの誕生日に合うように印刷屋さんにしたのみました。発行人は、私なのです。詩というの、私せんぜん読んでこないんです。なんかひどく特殊なかんじがして、とても疎外感を持つのです。向井さんの詩をはじめ読んだときこそうでした。でもこんどの詩集は私のすぐそばであったことばかりがテーマなので、向井さんの詩をおして、そのあったことをもう一度見なおしてみよう。たとえばこらをまくという、エエかげんあきあきしてきていた行爲がすごく新鮮で、別の見方ができたりしたんです。私がいちのまんやけど、読物としても面白くて、いっ気に読みとおしてしまいました。

(たぐん)
これ自費出版なんです。お金がだいぶかかたんだよね。日頃詩なんてあんまり読んだことのない私のまわりの人や、全国の仲間には是非買って読んでほしい。定価千二百円だけれど、無理してでも買ってほしいな。おねがいしまーす。
▲ 版下の出来たやつから印刷してもらってたら、又々機械が故障してしまっ。修理屋さんいわく、「もう寿命です」。ああまた金か。

宇利乃奈加向乃安伊古止葉 喫天鵬乃里感

おし
らせ



▲ 9月19日(月) 死刑廃止の会 雑談会。つゆくさ・6時半 死刑問題について、なんていうとかた苦しいと思われちゃうかもありませんが、人間の本性にふれることになるので、実にゆたか、やわらかい話になってしまふのですよ。一度のときをきてみませんか。

▲ 9月25日(日)、二ツの会。つゆくさ・2時より

時間があがるけど、時間がながいーこれは実に意味深いことです。東アフリカ反日英戦線の人たちが提起した問題を、今ほど切実に自分の肉體として考えることをせまられてる時はないと田んごうです。いよいよ、アソウな世の中で、仲間はずれより三人がいい。あなたの出現を待ちます。

▲ 9月26日(月) 関西電力和歌山営業所火災被害事件判決

いよいよ貴志くんの判決公判です。今まで来たことのない人も、今回はぜひ
▲ 9月29日(木) 反弾圧・連続(うさ)パート2

(時間) 6時南場 (場所) 太融寺 (主催) 市民住民運動支援村
ナカスドイツ以来、権力のやり方は手がこんで来たようだ。昔のように4千や鑽で人民をおどかすことはできなくなった。
ミシーゆうたりマルコメ。という具合に条件返射をつくりだすための権力側の作戦が反作戦だ。地獄への道は広告でしきつめられてる。の著者吉田智弥さんがそのへんの事情をくわしく話して下さいます。これを聞きのがすとマルコメミンになてしまひます。Ⓜ

切手に〇〇を!

別冊 公害 反反反

大阪府	2
京都府	2
兵庫県	2
奈良県	2
和歌山県	2
徳島県	2
香川県	2
愛媛県	2
高知県	2
福岡県	2
佐賀県	2
熊本県	2
大分県	2
宮崎県	2
鹿児島県	2
沖縄県	2

横濱口座 大阪一三三七三七 ウリジヤパン